

壁紙が剥がれかかっている——。穏やかな日曜の朝。リビングの

ラジオはゆったりとした音楽を垂れ流し、妻と娘が談笑しながら温かいスープを飲み干そうとしている。これ以上ないくらい完璧な休日の朝。だが僕の眼はリビングの壁紙に釘付けになっていた。部屋の角の

部分から数センチ、壁紙が剥がれかかっている。これ以上ないくらい完璧な休日の朝。

「ねえ、聞いてる?」壁紙に気を取られ話を聞いていなかつた僕に、

娘が語氣を強めた。「また学校行きたいねって話してたの」妻が助け舟を出してくれたので、浅く領き彼女に同意する。娘の学校が体校になって半年、四六時中家族と過ごす生活にも慣れてきた。この生活もあと

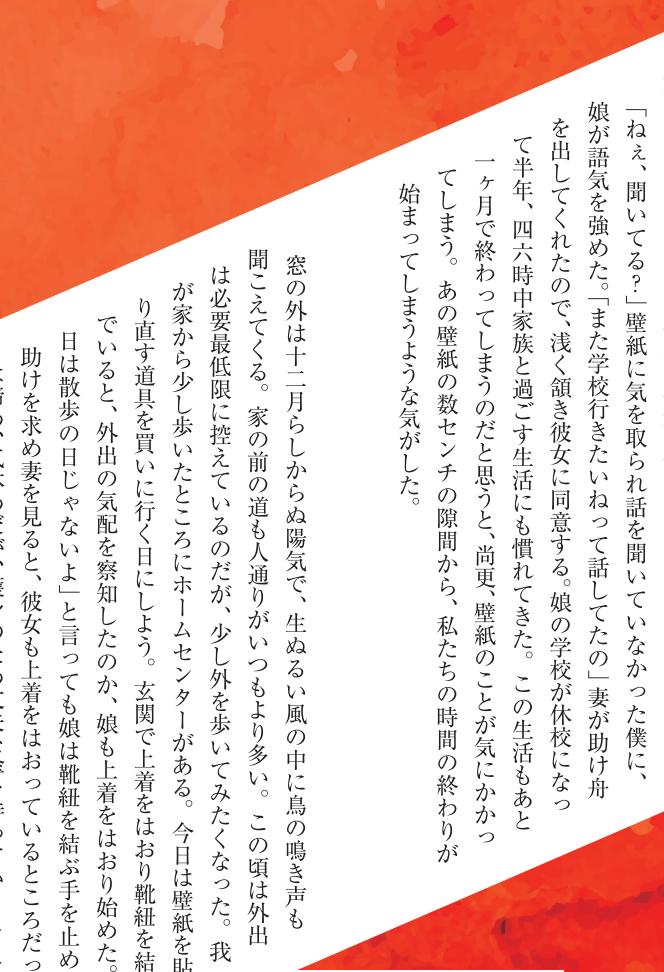
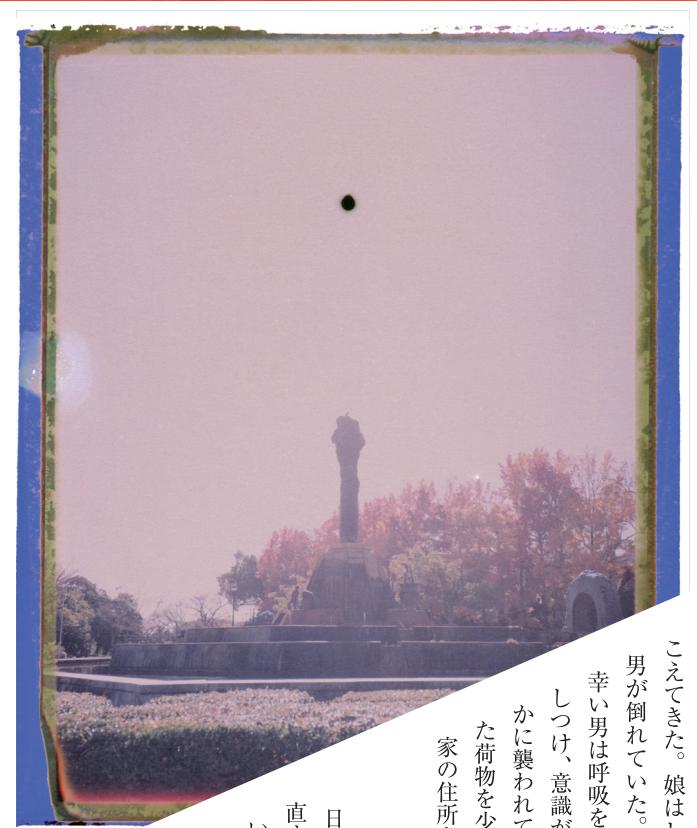
一ヶ月で終わってしまうのだと思うと、尚更、壁紙のことが気にかかるてしまう。あの壁紙の数センチの隙間から、私たちの時間の終わりが始まってしまうような気がした。

ゆるやかな片鱗

藤井颯太郎

「声の展示」朗読——今井冬菜 城野佑弥

撮影(@豊中市内)——鈴木竜一朗



ゆるやかな片鱗

藤井颯太郎

「声の展示」朗読——今井冬菜 城野佑弥

撮影(@豊中市内)——鈴木竜一朗

日が暮れる前に坂道を上り帰路につく。帰宅次第、娘と壁紙を貼り直す準備を始める。前の壁紙を元気よく剥がしながら「やっぱり学校いきたいなあ」と娘がぼやく。「ま、一ヶ月だけなんだけどね」と壁にノリを貼る娘に「まだ一ヶ月もあるからね」と答え、僕らは黙々と壁紙を貼り始めた。時間はあつという間に過ぎ、今日も巨大な夕日が沈んでいく。「暑いねー」と娘が上着を脱ぐ。「パパが子供の頃見た夕日はもうとちつちやくて、この十分の一くらいの大きさだったんだよ」と伝えると「じゃあ、今の夕日の方が綺麗だね」というので、そうだねと返した。

ラジオのニュース番組では、キャスターが放送終了の挨拶をしている。挨拶が終わると優雅な音樂は消え、今度はザーザーと耳障りないノイズを垂れ流し始めた。そろそろ電気も使えなくなるかもしけない。「この壁紙、やっぱりいいね」と言いながら、新しいワンピースを着た妻がリビングへやってきた。あと一ヶ月。三人でゆるやかに暮らしていくんだ。毎晩、大きく美しい夕陽を眺めながら。